

2026年1月

第184号

# ぱれっと



株北日本ベストサポート

Tel 018-883-1888



## 年頭に当たって

新年あけましておめでとうございます。2026年は干支で言えば「午（うま）」の年。午は、力強く前へ進む象徴とされる一方で、古くから「走り続けると息切れする存在」とも語られてきた。勢いがあるからこそ、手綱をどう握るかが問われる年でもある。その手綱とも言える税制大綱が2025年12月19日、自民党と日本維新の会で取りまとめられたので、中身を確認していきたい。この大綱には、今の政治・社会が抱える“二つの現実”が同時に刻み込まれているように見える。一つは、物価高・暮らしの負担への対応。もう一つは、安全保障や国際競争力を支えるための財源の確保だ。

まず注目すべきは、所得税がかかり始める年収の基準、いわゆる「年収の壁」が178万円まで引き上げられた点だ。これは現行の103万円の壁や基礎控除・給与所得控除の合計からの調整を踏まえたもので、中低所得層の税負担を大幅に軽減する狙いがある。結果として約80%の給与所得者が恩恵を受けるとされ、可処分所得の底上げにつながる可能性が高い。生活コストが上昇する現代社会において、消費や貯蓄といった家計行動を安定させ、景気全体の底支えに寄与するという政策的意図を持っているように見える。

次に、税制大綱のもう一つの側面、「国の財政構造と長期的な持続可能性」が、今回の大綱で鮮明になっている。象徴的なのは、防衛財源の確保策として、所得税に新たな付加税が導入されるということだ。2027年1月から所得税額に1%の付加税を上乗せする方針が示された。この措置は、国としての安全保障意識が高まる国際環境を反映したものともいえる。企業に関しては、引き続き投資促進税制や研究開発投資に対する優遇措置が盛り込まれている。特に中小企業向けの設備投資促進税制や事業承継支援、インボイス制度の運用改善など、現場の経営判断に直結する実務的な配慮が目立つ。これは、日本経済がただ単に安定成長を維持するだけでなく、成長のエンジンを再点火することが求められている現実を反映するものだ。さらに、暗号資産（仮想通貨）に対する税制の明確化や分離課税の導入・損失繰越控除の創設は、新たな経済活動や投資行動を誘発する意図を感じさせる。こうした措置は、経済のデジタル化・グローバル化の中で税制が果たすべき役割を再定義しようとしているともいえる。

この大綱を読むと、税制がもはや単なる歳入確保の道具に留まらず、社会の価値観をどう再編するかという政治的判断であることが見えてくる。物価高への対応や所得税の負担調整は、目先の生活実感に直結する。また一方で、将来世代の安全保障や新たな経済領域の課題に対応するための税源整備は、国全体の行く末を左右する。税制は数字の羅列ではなく、国家が優先する価値の縮図だ。2026年度の税制大綱は、「暮らしの実感」と「国家の持続可能性」をどう両立させるかという問い合わせに対する、最新の解答の一つである。それは、私たち一人ひとりが自分の未来と社会の未来を同時に考え始めるきっかけにもなるだろう。

## 恐怖心は自分の中から生まれる

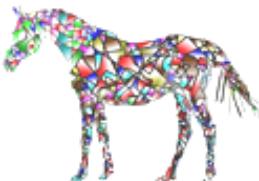
ニーチェの言葉

この世の中に生まれる悪の四分の三は、恐怖心から起きている。

恐怖心を持っているから、体験したことのある多くの事柄について、なおまだ苦しんでいるのだ。それどころか、まだ体験していないことにすら恐れ苦しんでいる。

しかし、恐怖心の正体というのは、実は自分の今の心のありようなのだ。もちろんそれは、自分でいかようにも変えることができる。自分自身の心なのだから。

【曙光】



## 満足が贅沢

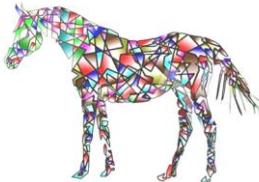
ニーチェの言葉

今では享楽者とか快樂主義者という誤解された意味でのみ使われている『エピキュリアン』という言葉だが、その語源となった古代ギリシアの哲学者エピキュロスは、生きていくうえでの快樂を追求した。

そしてたどりついた頂点が、満足という名の贅沢だった。その贅沢に必要なものは、しかし多くはなかった。すなわち、小さな庭、そこに植わっている数本のイチジクの木。少しばかりのチーズ、三人か四人の友達。

これだけで、彼は充分に贅沢に暮らすことができた。

【漂泊者とその影】



## 心の生活習慣を変える

ニーチェの言葉

毎日の小さな習慣の繰り返しが、慢性的な病気をつくる。

それと同じように、毎日の心の小さな習慣的な繰り返しが、魂を病気にしたり、健康にしたりする。

たとえば、日に十回自分の周囲の人々に冷たい言葉を浴びせているならば、今日からは日に十回は周囲の人々を喜ばせるようにしようではないか。

そうすると、自分の魂が治療されるばかりでなく、周囲の人々の心も状況も、確実に好転していくのだ。

【曙光】



長谷川 町子 (日本初の女性漫画家 代表作サザエさん)

## 毎日笑ってもらいたい

1920年1月30日

佐賀県小城郡東多久村(現:多久市東多久町)で父・勇吉と母・サタ(貞子)の3人姉妹の次女として生まれる。

1934年

娘たちを東京で教育を受けさせたいという母貞子の意向で一家揃って上京。私立山脇高等女学校の3年生に編入。

当時漫画『のらくろ』が一世を風靡。「(原作者の)田河水泡の弟子になりたい」と、山脇高女在学中に田河水泡に師事する。

1935年10月

15歳。『少女倶楽部』10月号に『狸の面』で漫画家デビュー。

1939年

初連載作品『フィフウミよチャン』で漫画家として地位を確立。

1944年

24歳。第二次世界大戦中、空襲からの疎開と微用回避のため一家は福岡市百道に疎開。

1946年4月22日

26歳。フクニチ新聞社から連載漫画の依頼が舞い込み、引き受ける。自宅近所の百道海岸を散歩し海辺の風景を眺めているときに登場人物に海にちなんだ名前をつけて『サザエさん』の家族構成や名前を思いつく。

1946年12月

家族4人で出版社「姉妹社」を設立。

1947年1月1日

『サザエさん』第1巻を出版。(定価12円)

1969年

アニメ『サザエさん』放送開始。

1974年

『サザエさん』連載終了。

1982年11月

紫綬褒章受章。

1985年

東京世田谷区に「長谷川美術館」を建て、初代館長を務める。

1991年

日本漫画家協会賞文部大臣賞を受賞。

1992年5月27日

心不全により逝去。享年73歳。

## オススメのBOOK



### 「ドイツ人のすごいリーダーシップ」

著者西村栄基・すばる舎

著者は2つの会社での海外駐在で計17年間ドイツに在住した西村栄基氏。本書の中でドイツ型リーダーシップに書かれているが、その本質は「カリスマ性」ではなく、「仕組みと責任の明確化」にあると強く感じた。ドイツでは、リーダーが全てを決めて引っ張るのではなく、役割・権限・責任を事前に明確に定義し、その枠組みの中でメンバーが自律的に動くことが重視されている。特に印象に残ったのは、感情や空気に流されず、合意形成を重んじる姿勢である。この「議論は徹底的に、実行は迅速に」という姿勢は、日本企業が抱えがちな曖昧な指示や責任の所在不明といった課題を解決するヒントになると感じた。

職場の教養1月号から2話ご紹介します



初 詣 (願いを言葉にしてみましょう)

新年に寺社へ参拝する初詣は、日本の文化に根差した大切な習慣です。

初詣は、大晦日から元旦にかけて神社に籠り、新しい年の豊作や安全を夜通し祈願する「年籠り」という風習が起源と伝えられています。

多くの人は、初詣で神様や仏様へ日頃の感謝を伝えると共に「家内安全」「無病息災」「学業成就」「商売繁盛」などを願うことでしょう。

新年の始めに願い事をする行為は、単なる祈りではなく、自分の目標や責任を言葉にする良い機会にもなります。

願い事を言葉にすることにより、心が定まり、日々の行動に意識が向かいます。それは自分を見つめ直す一歩になり、日々の実践の土台となることでしょう。

さらに、地域の寺社に集う多くの人々の姿には、日本人としての、また地域の共同体としてのつながりが感じられます。

個人の願いが社会の調和へとつながる、そんな営みが初詣には込められています。

願いを言葉にし、より良い一年にするために歩んでまいりましょう。

家族の団らん (家庭や職場で絆を深めましょう)

久しぶりに家族そろって新年を迎えたA氏。ここ数年は家族それぞれの予定を優先し、自由に過ごしていましたが、今年は家族全員で神社へ初詣に行きました。帰宅後、A氏はおせち料理を食べながら、テレビをつけると、正月番組が中心に放送されており、中には昭和の懐かしい映像も流れていました。昭和世代のA氏と妻は、懐かしさに浸りながら笑ったり驚いたりと、釘付けになっていました。

一方、子供は「今の時代とずいぶん違うね」と感想を漏らしつつも、番組をきっかけに会話が弾み、共通の話題で笑い合う時間が生まれました。

「今年は良い年になりそうだなあ」と思いを巡らせていると、妻と子供は「来年以降も正月は皆で過ごそうよ」と笑顔でA氏に語りかけました。A氏は改めて家庭の温もりと家族の絆を実感したのです。

世の中は変化し、家庭の形や価値観も多様化しています。しかし、どんな時代でも、家族の絆は人が生きるうえで欠かせないものだとA氏は感じたのでした。

地域や職場など、身近な場所でも団らんの場を設け、心を通わせたいものです。

【編集後記】

昨年は県と市で16年ぶりに新リーダーが誕生し、刷新への期待を受けての船出となつた。しかし、大雨被害や三菱商事の洋上風力の撤退、熊による人身被害などどうにもしようがないことが多く、その対応に追われていた印象がある。今年は、このような苦難にも折れずに続けていくための基盤を整える重要な年になると思う。「丙午（ひのえうま）」と聞くとどこか身構えてしまう空気があるが、丙は本来「陽の火」を意味する。燃え広がる破壊ではなく、暗闇を照らし、道を示す火。そんな光を頼りに力強く前に進む年にしたい。